

## 「日本近代文学演習」の授業評価

国語専修・青木亮人

### 1. 授業の概要

日本近代文学演習は、学校教育実践コース国語教育専修・総合人間形成課程国際理解教育コース日本アジア理解分野の選択科目である。三年次の後期開講課目という性格上、一～三年前期までに日本近代文学の一定の知識及び方法論を学んだことを前提とし、演習形式にて各受講生の問題意識を深めることを目標とした。

授業展開としては各回ごと発表者が文学作品を選択し、その作品を文学研究の方法論に沿って分析・解釈を深めた上で授業発表に臨み、また受講者は発表を聞いた後に質問・意見・感想等を発表者に投げかけ、発表者はそれに回答するという形を取った。

また、授業を進めるにあたり留意したのは、文学研究の角度から近代文学作品を読解するための方法論や認識等を、受講生に意識してもらうことであった。教育理論や授業実践の方法論でなく、文学研究の世界で培われた読解法で作品を解きほぐすと何が判明するか、それはどのように分析し、解釈を重ね、何をもって作品読解と見なすかを常に認識することを受講生に求め、またそれを実感しうるための演習形式の授業であることを強調した。

この文学研究としての読解に関し、本講義で受講生に求めたのは下記の点である。

- ①作家の実人生や思想等を作品に直結させず、まず作品自体を読むことで作品の特徴や問題点を抽出すること
- ②その上で、作家の人生や作品が執筆された状況、また時代や文学史の趨勢などの作品外部の情報をある程度把握し、読解に援用すること
- ③同時に、対象作品に関する文学研究上の先行学術論文を可能な限り読み、これまで何が問題とされ、何が明らかになり、何が明らかにされていないのかを把握し、その上で①②に沿った読解を深めつつ問題点を抽出し、発表用にまとめる

上記以外にも文学研究の方法論は存在するが、本講義ではさしあたり①～③に比重を置くこととした。

その理由の一つとして、受講生の多くは学校教員を目指しており、そのため大学の授業での学習内容は学校教育現場の作品読解に直結することが想定される。従って、授業の主眼としては受講生が文学研究の方法論を身につけるといより、教科書指導書や一般の読解とは異なる作品解釈の方法や認識があることを演習形式で実感してもらうこととした。

各回の具体的な展開及び発表者の対象作品は下記の通りである。

- 01：ガイダンス
- 02：演習発表の実例
- 03：谷崎潤一郎「春琴抄」
- 04：芥川龍之介「羅生門」
- 05：芥川龍之介「杜子春」
- 06：森鷗外「舞姫」
- 07：森鷗外「高瀬舟」
- 08：横光利一「蠅」
- 09：宮沢賢治「銀河鉄道の夜」
- 10：太宰治「人間失格」
- 11：谷崎潤一郎「春琴抄」②／川端康成「伊豆の踊子」
- 12：坂口安吾「桜の森の満開の下」／夏目漱石「坊ちゃん」
- 13：太宰治「走れメロス」／横光利一「蠅」②
- 14：宮沢賢治「セロ弾きのゴーシュ」／太宰治「人間失格」②
- 15：まとめ

本講義は学校教育実践コース及び国際理解コースの学生が受講するため、1、2回目は教員がガイダンスを行うことで文学研究の方法論及び実践例を示し、また最終回に文学研究の角度から近代文学作品を読解することに関する総括を行った。

発表は二人一組で一作品を扱うこととし、一組が計二回発表するようスケジュールを調整した。3～10回目は一授業に一組、11～14回目は一回に二組が発表することにした。一回目の発表は文学研究的な読解に慣れてもらうため十分な時間を取り、二回目の発表では一授業に二組の発表とすることで短い時間内に要領良く論点を述べる

ことを主旨とした。

なお、成績評価は各回の発表・質疑応答・出席等により総合的に判断することとした。

## 2. 授業の目的・到達目標

シラバスに記載したのは下記の通りである。

### 【授業目的】

他講義等において学んだ近代文学研究を踏まえつつ、演習形式で実践的に研究を行い、文学読解における問題意識を高める。

### 【到達目標】

- ①日本近現代文学の読解を通じ、自身の問題意識を見出すことができる。
- ②論理的な筋道をもって発表を組み立てることができる。
- ③他者の意見に対して正しくコミュニケーションをとることができる。

先に述べた「授業概要」での授業展開の中で上記の目的・目標を実感してもらうことを目指した。

## 3. 授業評価法

2012年10月に赴任し、教育学部の共通DP以外に授業担当者がアンケート項目を用意して実施した方が望ましいことを知らなかったため、共通DP及び各回ごとに学生が提出するコメントを参考とした。

## 4. 授業評価結果

全体の傾向としては、「授業で学んだことは教育現場や授業実践に直接反映するものではないが、文学研究としての作品の捉え方や読解方法があることを学ぶことができ、学校教育での定説と異なる作品理解があることを知ることができた」といったものが多く、他には「普通には得がたい専門知識を知ることができた」といったものが多かった。

同時に、対象作品の先行研究を調べ、これまでの読解上での問題点を整理しつつ、その上で自身の新たな読解を説得力をもって提示するという手続きがほぼ初めてだったために困難を感じたという学生も多かった。

ただ、これらの作業を通じての新たな発見も少なくなく、特に芥川龍之介「羅生門」や森鴎外「高瀬舟」、太宰治「走れメロス」等の教科書定番教材に関する読解がそれまで学校で学んできた作品理解と異なっていたため、「有名とはいえ、文学作品の読み方が一つと限らないことを学ぶことができた」等の感想が多々見られた。

## 5. まとめ

授業が演習形式のため、授業担当者が全面的に授業展開を進めるといふより、受講生の積極的な姿勢が軸となって展開する性格を有する。今回の受講生はいずれも各回の発表準備及び発表、またそれに対する質問・意見等も活発に行うなど積極的に参加してくれたので、演習としてはそれなりの成果があったかと思われる。

ただ、反省点も少なくない。ここでは二点上げたい。

第一として、講義最初のガイダンス時に担当者が示した演習発表例である。それは実証研究とされる研究方法を中心に据えた内容であり、過去の作品を対象とした際、現在では忘れられた当時の時代状況や文学の趨勢、また作品内で扱われた事物や言葉の位相を現代人の感覚で捉えるのではなく、当時の感覚に沿って読み解くために作品発表時の資料を丹念に調査した上で作品読解を試みるというものである。

このような方法論は作品読解の一種として有効ではあるが、受講生たちの多くは将来学校教員として文学作品をいかに読解し、教授するかということ念頭に置きながら授業に臨んでいるため、あまり煩雑な資料調査や分析を求めてもさして妥当といえない面がある。あるいは当時の文学史の微細な流れや影響関係等を踏まえた上での専門的読解も、重要かもしれないが必須とはいえず、いずれも可能であれば適宜参照する程度でよいだろう。教員を目指す受講生に必要なのは「作品を丹念に読む」作業であり、その範囲での分析・解釈であることが望ましい。この点、授業開始時に示したガイダンスや発表例は専門的に過ぎた嫌があった。次年度以降の課題としたい。

第二の反省は各回発表者に対する質問の促し方である。受講生の多くは文学作品をいわば専門的に読解した経験が多くないため、どのような質問をすべきか、つまり質問内容が文学研究的なものかどうかを判断しながら質問する傾向があり、その結果、発表によっては質問や意見、感想が途絶えがちなこともあった。これは担当者が質問をうまく促したり、誘導したりすることでより活発になった可能性が高い。授業後に受講生のコメントを見ると、それぞれ意見や感想を抱えていることが多く、中には鋭い指摘や分析が含まれていることも少なくなかった。次年度以降は一定のレベルを保った上で受講生が活発に質問したり、意見を交わせるような雰囲気を作るよう、全体のバランスに留意しつつ授業展開を図っていきたい。